

# 子供と馬の話

小川未明

青空文庫



九月一日の大地震のために、東京・横浜、この二つの大きな都市をはじめ、関東一帯の建物は、あるいは壊れたり、あるいは焼けたりしてしまいました。そして、たくさんな人間が死にましたことは、もうみんなの知っていることだと思えます。いままで動いていた汽車はトンネルやレールが破壊したために、もう往來ができなくなりました。また、毎晩華やかな街を照らしていた電燈は、装置が壊れてしまったために、その後、幾日というものは、都じゆうが真っ暗になり、夜は、ランプをつけたり、ろうそくをともしなければなりませんでした。

そんなように、いままでつごうがよく、便利であったものが、すっかり狂ってしまった、三十年も四十年もの昔に帰ったように、不便なみじめな有り様になったのでありました。こういうめにありますと、いままで、便利な生活なんでもなく思っていた人々は、はじめ、平和な日のことにありがたみを感じたのでありました。そして、また、それが昔のようになるのには、どれほど、多くの労力と日数とがかからなければ、ならぬかということを知ったのであります。

私たちは、けつして、ひとりでに、この世の中が便利に、文明になったと思つてはい

けません。たとえば、一つのトンネルを掘るにも、どれほど、多くの人たちが、そのために苦しめ働いたかを考えなければならぬのです。

また、電気が、にぎやかな街々につくのも、てんでの家にきたのも、そこには、たくさんな人たちの労力とそれに費やされた日数があったことを考えなければなりません。

こうして、この世の中は、みんなの力によつて、文明になり、つごうがよくゆき、そして平和が保たれてきたのであります。

けつして、自分独りが、どんなに富裕であつても、また学問があつても、この世の中は、すこしもつごうよくいくものでもなければ、また文明になるものでもないことをよく知らなければなりません。それを知るには、こんどの災害はいい機会といつていいのです。

それですから、困っている人たちを困らない人たちは救わなければなりません。そして、いままでのように、みんなが自分の才能をふるつて、この世の中のために有益に働きますますつごうがよくいくように早くしなければならぬのだと思ひました。

もう一つ、この機会に、私たちは、知らなければならぬことがあります。それは、こ

の世よの中なかのために働はたらいているものは、ひとり、人間にんげんばかりでなく、馬うまも、牛うしも、よく人間にんげんのために働はたらいているということです。

この、ものをいうことのできない、おとなしい、かわいそうな動物どうぶつを、心こころある人間にんげんは、憐あわれんでやらなければなりません。いじめられるからといっていじめてはなりません。太郎たろうと二郎じろうとは、よく、朝あさ起きるときから、夜よる寝るまでの間あいだに、幾いくたびということなく、けんかをしたかしません。それは、ほんとうにたがいに憎にくみ合あったからではなく、かえって仲なかのいいためではありません。つねにいい争あらそうのには、どちらか無理むりなところがありました。

お父とうさんは、どういったら、二人ふたりがおとなしくなるだろう。どんなお話はなしをして聞きかせたら、身みにしみて聞きくだろうと頭あたまをなやましていられました。

あるときのこと、お父とうさんは、近きん所じよの人ひとたちといっしょに、夜やけい警けいをしていられました。なんといつても、まだみんなは、おちつくことができませんでした。そして、火か事じをどんなにおそれていたかしません、夜やけい警けいをしなければ、みんながおちついて、夜よるも眠ねむることができなかつたからであります。

往おう来らいを見みていますと、日ひが暮くれてからも、避ひ難なんをする人ひとの群むれがつづいて通とおりました。

五人連れになつたもの、三人連れのもの、また、二人、四人というふうには、いづれも、ぞうりをはいたり、また、はだしになつたりして、わずかばかりの荷物を負つて、男も、女も、ふうなどはかまわずに、たいていはまったく逃げ出したままの着の身、着のまま、一刻も早く、この怖ろしい都を逃れて故郷の方へ帰ろうとするものばかりでありました。そうした群れが、はや幾日つづいたことでありましょう。

なかには、手を引かれて、もう歩けなくなつたのを、お母さんやお父さんに、はげまされて、とぼとぼとゆく小さな子供もありました。

この道を通つて、みんなは、汽車の立つ駅の方へとゆくのでした。

「ほんとうに、気の毒な人々ですね。」と、夜警をしている近所の人たちが、その中でも、子供を三人も四人もつれて、みすぼらしいふうをして、さも疲れたようすで歩いてゆく家族のものを見ましたときにいいました。

「休んでおいでなさい。」

「おむすびも、お菓子もありますから、めしあがつておいでなさい。」

夜警をしていた、太郎のお父さんや、近所の人たちは、口々にこういいました。

すると、疲れた家族のものは、こちらを向いて、ちよつと躊躇躊躇しましたが、ついに

立ち止まって、

「どうぞ、おむすびを一つ子供らにやってください。」と、父親らしい人がいました。「さあ、さあ、たくさんありますから、みんなめしあがつてください。」と夜警の人々はいつて、盆を持ってきて差し出しました。

子供らは、腹が減っていますので、みんなおむすびを喜んで食べました。やがて、その人たちは、厚くお札をいつて、また道を歩いてゆきました。

「あんなような子供があつては、汽車に乗るのが、どんなに骨おりだかしれません。」彼らの去った後で、みんなは、その人たちの停車場に着いてから先のことなどを想像して同情したのであります。

昼から、夜となく、つづいた避難する人たちの群れも、さすがに、真夜中になると、いずれも、どこかに宿るものとみえて、往來がちよつとの間はとだえるのでした。

空を仰ぎますと天の川が、下界のことを知らぬ顔に、昔ながらのまま、ほのぼのとう流れているのであります。

「もう、何時ごろでしょうか。」

「二時をすこし過ぎました。」

あたりは、しんとしていました。このとき、あちらから、山なりに荷物を積んで、荷馬車がやってきました。

その荷車を引いているのは、白い馬でありました。そして、先に立って、手綱を引いている男は、体のがっしりした大男でありました。馬も、男も、だいぶ疲れているように見えたのであります。

太郎のお父さんは、これを見て、

「どこからきたのですか、よほど、遠いところからきなされたとみえますね。」と、やさしく声をかけられました。

ゴト、ゴトと重い荷車を馬に引かせてきた男は、手綱をゆるめて立ち止まりました。

「横浜から、今日の昼ごろ出かけてまいりました。これから、もう一里も先へゆかなければなりません。馬もだいぶ疲れています。」と答えました。

「そうとも、ここから横浜までは、十里あまりもありますからね。」

「六郷川の仮橋を渡つてきなすつたのですね。」

「ええ、そうです。また、この荷物を下ろして、すぐに、今夜のうちに帰るつもりです。」と、馬を引いてきた男はいいました。



「また、遠い道を帰るのですか。」

「あすの晩方に、あちらへ着きます。そして、あさつては一日馬を休めます。」と、男は、答えました。

夜警の人々は、この話を聞いて、人間も、馬も、どんなに疲れることだろうと思いましたが。

こんなことは、平常多くあることでありません。汽車が通つていれば、汽車で運搬されるのです。こうした、変事があつたときは、みんなが助け合つたり、骨をおらなければならぬのであります。

男は、また、手綱を引いて、ゆうこうとしました。すると、馬は、もうだいぶ疲れているものとみえて、じつとして、歩こうといたしませんでした。もっとこうして、休んでいたいと思つたのであります。

しかし、いつまでも、男はそうしていることができないのを知っています。休めば、休むほど、疲れは出てきて、だんだん歩けなくなるものだからです。

「ど、ど、さあ、歩くだ。」と男は、馬を心からいたわるように、やさしくいきました。

このとき、男は、けつして、馬をしからなかつたのでした。ひとり人間だけではなく、

馬でも、牛でも、感情を解するものは、しかるよりは、やさしくしたほうが、いうことをきくものです。

馬は、また、重い荷車を引いて歩いてゆきました。

「こんなときは、馬もなかなか骨おりだ。」と、そのとき、太郎のお父さんといっしょに夜警をしていた人たちは感じたのであります。

翌日のことでした。太郎と二郎とが、またちよつとしたことから、けんかをはじめましたときに、お父さんは、昨夜見た、あわれな子供らや遠いところから歩いてきた馬の話をして二人にきかされました。

「かわいそうな人たちのことを思ったら、けんかどころではないだろう。」と、いわれませんでしたときに、二人は、ほんとうに感心をいたしました。

太郎と二郎は、自分のいままで読んでしまつて重ねておいた雑誌や、書物や、またおもちやなどを不幸な子供たちにあげたいとお父さんに申しました。

「それは、いい考えだ。」とお父さんはうなずかれました。そして、二人は、またお父さんに向かつて、

「白いお馬は、もうお家へ帰つたでしようか。」と兄弟は、一日の間に幾たびも思い

出<sup>だ</sup>しては、聞<sup>き</sup>いていたのでありました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㊦ 講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

底本の親本：「ある夜の星だち」イデア書院

1924（大正13）年11月

初出：「童話」

1923（大正12）年11月

※表題は底本では、「子供《こども》と馬《うま》の話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：へくしん

2020年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 子供と馬の話

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>